

二〇〇九年度

A

国語 (1)

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

八っちゃんはばあやのひざに抱かれながら、まだくやしうと泣きつづけていた。ばあやが乳をあてがっても呑もうとしなかった。時々思い出しては大きな声を出した。しまいにはその泣き声が少し気になり出して、僕は八っちゃんとかんかしなければよかったなあとと思い始めた。さつき八っちゃんがここにこ笑いながら小さな手に基石をいっばい握って、僕がいらないといっても僕にくれようとしたのも思い出した。その小さな握りこぶしが僕の目の前でひよこりひよこりと動いた。

そのうちにばあやが畳の上に握っていた基石をばらりとまくと、泣きじゃくりをしていた八っちゃんは急に泣きやんで、ばあやのひざからすべり下りてそれをおもちやにし始めた。ばあやはそれを見ると、

「そうそうそうやって①おとなにお遊びなさいよ。ばあやは八っちゃんのおちゃんちゃんを急いで縫い上げますからね」

と言いながら、せつせと縫物をはじめた。

僕はその時、白い石でウサギを、黒い石でカメを作ろうとした。カメの方は出来たけれども、ウサギの方はあんまり大きく作ったので、片方の耳の先が足りなかった。もう十ほどあればうまく出来上がるんだけれども、八っちゃんを持つていつてしまったんだから仕方がない。

「八っちゃん十だけ白い石くれない？」

といううとしてふつと八っちゃんの方に顔を向けたが、縁側の方を向いて基石をおもちやにしている八っちゃんを見たら、口をきくのが変になった。②今けんかしたばかりだから、僕から何かいい出してはいけなかった。だから仕方なしに僕はウサギをくずしてしまつて、もう少し小さく作りなおそうとした。でもそうすると③カメの方が大きくなり過ぎて、ウサギが居眠りしなくてもカメの方が駆けつことに勝ちそうだった。だから困っちゃった。

僕はどうしても八っちゃんに足らない基石をくれろといいたくなつた。八っちゃんはまだ三つですぐ忘れるから、そういつたらさっきのように丸い握りこぶしだけうんと手を延ばしてくれるかもしれないと思った。

「八っちゃん」

といううとして僕はその方を見た。

そうしたら八っちゃんばあやのお尻の所で遊んでいたが真っ赤な顔になって、目にいっぱい涙をためて、口を大きく開いて、手と足を一生懸命にばたばたと動かしていた。おまけに見ていると、両手を口のところにもって行って、無理に指の先を口の中に入れようとしたりした。何だかふざけているのではなく、本気の本気らしくなつて来た。しまいには④()を白くしたり黒くしたりして、

げえげえと吐きはじめた。

僕は気味が悪くなつて来た。八っちゃんが急に怖い病氣になつたんだと思い出した。僕は大きな声で、

「ばあや……ばあや……八っちゃんが病氣になつたよう」と怒鳴ってしまった。そうしたらばあやはすぐ自分のお尻の方をふり向いたが、八っちゃんの肩に手をかけて自分の方に向けて、急に慌てて後ろから八っちゃんを抱いて、

「あら八っちゃんどうしたんです。口をあけてごらんさい。口ですよ。こつちを、明るい方を向いて……ああ基石を呑んだじゃないの」

と言うと、握りこぶしをかためて、八っちゃんの背中を続けさまにたたきつけた。

「さあ、かーつといつてお吐きなさい……それもう一度……どうしようねえ……八っちゃん、吐くんですよ」

ばあやは八っちゃんをかつきりひざの上に抱き上げてまた背中をたたいた。僕はいつ来たとも知らぬうちにばあやの側に来て立ったままで八っちゃんの顔を見おろしていた。八っちゃんの顔は血が出るほど赤くなっていた。ばあやはどうもりながら

「兄さんあなた、早くいつて水を一杯……」

僕は皆まで聞かずに縁側に飛び出して台所の方に駆けて行った。水を飲ませさえすれば八っちゃんの病氣はなおるにちがいないと思った。そうしたらばあやが後ろからまた呼びかけた。

「⑤兄さん水は……早くお母さんの所にいつて、早く来て下さいと……」

僕は台所の方へ行くのをやめて、今度は一生懸命でお茶の間の方に走った。

お母さんも障子を明けはなして日なたぼっこをしながら静かに縫物をしていらした。その側で鉄瓶のお湯がいい音をたてて煮えていた。

⑥僕にはそこがそんなに静かなのが変に思えた。八っちゃんの病氣はもうなおっているのかもしれないと思った。けれども心の中は駆けつこをしてしている時みたいにどきんどきんとしていて、うまく口がきけなかった。

「お母さん……お母さん……八っちゃんがね……こうやっていゝんですよ……ばあやが早く来てつて」

といつて八っちゃんのしたとおりの真似を立ちながらして見せた。お母さんは少しだるそうな目をして、にこにこしながら僕を見たが、僕を見ると急に二つに折っていた背中を真っ直ぐになさつた。

「八っちゃんがどうかしたの」

僕は一生懸命真面目になつて、

「うん」

と思ひ切り頭を前の方にこくりとやった。

二〇〇九年度

A

国語 (2)

〔注意〕 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

「うん……八っちゃんがこうやって……病気になるたの」
 僕はもう一度前と同じ真似をした。お母さんは僕を見て
 いて⑦思わず笑おうとなさったが、すぐ心配そうな顔にな
 って、大急ぎで頭にさしていた針を抜いて針さしにさして、
 慌てて立ち上がって、前かけの糸くずを両手ではたきなが
 ら、僕のあとからばあやのいる方に駆けていらした。

「ばあや……どうしたの」

お母さんは僕を押しのけて、ばあやの側に来てこうおっ
 しゃった。

「八っちゃんあなた……基石でもお呑みになったんでし
 ようか……」

「⑧お呑みになったんでしようかもしないもんじゃないか」
 お母さんの声は怒った時の声だった。そしていきなりば
 あやからひったくるように八っちゃんを抱き取って、自分
 が苦しくってたまらないような顔をしながら、ばたばた手
 足を動かしている八っちゃんをよく見ていらした。

「象牙のおはしを持って参りましょうか……それでのどを
 撫でますと……」ばあやがそういうかわいぬに、

「刺がささったんじゃあるまいし……兄さんあなた早く行
 って水を持っていらつしやい」

と僕の方を御覧になった。ばあやはそれを聞くと立ち上が
 ったが、僕はばあやが八っちゃんをそんなにしたように思
 ったし、用は僕がいいつかったのだから、ばあやの走るの
 をつき抜いて台所に駆けつけた。けれども茶碗を探してそ
 れに水を入れるのはばあやの方が早かった。僕はくやしく
 なってばあやにかぶりついた。

「水は僕が持つてくんだい。お母さんは僕に水を……」

「それどころじゃありませんよ」

とばあやは怒ったような声を出して、僕がかかって行くの
 を茶碗を持っていない方の手で振りはらって、八っちゃん
 の方に行ってしまった。僕はばあやがあんなに力があると
 は思わなかった。僕は、

「⑨僕だ僕だ僕だ僕だ僕が持つて行くんだい」

と泣きそうに怒って追っかけてたけれども、ばあやがそれ
 お母さんの手に渡すまでばあやに追いつくことが出来な
 かった。僕はばあやが水をこぼさないでそれほど早く駆け
 られるとは思わなかった。

お母さんはばあやから茶碗を受け取ると八っちゃんの口
 の所にもって行った。半分ほど襟首に水がこぼれたけれ
 ども、それでも八っちゃんは水が飲めた。八っちゃんはむ
 せて、苦しがつて、両手で胸の所を引っかくようにした。⑩懐

ろの所に僕がたたんでやった「だまかし船」が半分顔を出
 していた。僕は八っちゃんが本当にかわいそうでたまらな
 くなった。あんなに苦しめばきつと死ぬにちがいないと思
 った。死んじやいけないけれどもきつと死ぬにちがいない
 と思った。

今までくやしがつていた僕は急に悲しくなった。お母さ
 んの顔が真っ青で、手がぶるぶる震えて、八っちゃんの顔
 が真っ赤で、ちつとも八っちゃんの顔みたいでないのを見
 たら、一人ぼっちになってしまったようで、我慢のしやう
 もなく涙が出た。

お母さんは僕がべそをかき始めたのに気もつかないで、
 夢中になって八っちゃんの世話をしていなかつた。ばあや
 はひざをついたなりでのぞきこむように、お母さんと八っ
 ちゃんの顔とのくつき合っているのを見おろしていた。
 そのうちに八っちゃんが胸にあてがつていた手を放して
 驚いたような顔をしたと思ったら、いきなりいつもの通
 りな大きな声を出してわーっと泣き出した。お母さんは夢
 中になって八っちゃんをだきすくめた。ばあやはせきこん
 で、

「通りましたね、まあよかったこと」

といった。きつと基石がお腹の中にはいつてしまったのだ
 ろう。お母さんも少し安心なさったようだった。僕は泣き
 ながらも、お母さんを見たら、その目に涙がいつぱいたま
 っていた。

その時になってお母さんは急に思い出したように、ばあ
 やにお医者さんに駆けつけるようにとおっしゃった。ばあ
 やはびよこびよこいく度も頭を下げて、前垂で、顔をふ
 きふき立つて行った。

泣きわめいている八っちゃんをあやししながら、⑪お母さ
 んはきつい目をして、僕に早く基石をしまえとおっしゃっ
 た。僕は叱られたような、悪いことをしていたような気が
 して、大急ぎで、基石を白も黒もかまわず入れ物にしまっ
 てしまった。

八っちゃんは寝床の上に寝かされた。どこも痛くはない
 と見えて、泣くののをよそうとしては、また急に何か思い出
 したようにわーっと泣き出した。お母さんはそのたんびに
 胸が痛むような顔をなさった。そして、

「さあもういいのよ八っちゃん。どこも痛くはありません
 わ。弱いことそんなに泣いちゃあ。かあちゃんがおさすり
 してあげますからね、泣くんじやないの。……あの兄さ
 ん」

といつて僕を見なすつたが、僕がしくしくと泣いているの
 に気がつくつと、

「まあ兄さんも弱虫ね」

といいながらお母さんも泣き出しなかつた。それなのに泣
 くのを僕に隠して泣かないような風をなさるんだ。

「兄さん泣いてなんぞいないで、おざぶとんをここに一つ
 持つて来てちょうだい」

とおっしゃった。僕はお母さんが泣くので、泣くのを隠す
 ので、なお八っちゃんが死ぬんではないかと心配になつて
 お母さんのおっしゃるとおりにしたら、ひよつとして八っ

二〇〇九年度

A

国語(3)

〔注意〕答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

ちゃんが助かるんではないかと思つて、すぐざぶとんを取りに行つて来た。

お医者さんは、白いひげの方ではない、金縁の目がねをかけた方だった。その若いお医者さんが八っちゃんのお腹をさすったり、手くびを握ったりしながら、心配そうな顔をしてお母さんと小さな声でお話をしていた。お医者の帰った時には、八っちゃんは泣きづかれにつかれてよく寝てしまった。

お母さんはそのそばにじつと座つていた。八っちゃんは時々怖い夢でも見ると見えて、急に泣き出したりした。

その晩は僕はばあやと寝た。そしてお母さんは八っちゃんとのそばに寝なされた。ばあやが時々起きて八っちゃんの方に行くので、せつかく眠りかけた僕はいく度も目をさました。八っちゃんがどんなになつたかと思うと、僕は本当に淋しく悲しかった。

時計が九つ打つても僕は寝られなかった。寝られないなあと思つているうちに、ふつと気がついたらもう朝になつていた。いつの間に寝てしまつたんだろう。

「兄さん目がさめて」

そういうやさしい声が僕の耳元でした。お母さんの声を

聞くと僕の体はあたたかになる。僕は目をぱつちり開いてうれしくつて、思わず寝がえりをうって声のする方に向いた。そこにお母さんがちゃんと着がえをして、頭をきれいに結つて、にこにことして僕を見つめていらした。「およろこび、八っちゃんがね、すっかりよくなつてよ。夜中にお通じがあつたから基石が出て来たのよ、……でも本当に怖いから、これから兄さんも⑫基石だけはおもちゃにしないでちょうだいね。兄さん……八っちゃんが悪かつた時、兄さんは泣いていたのね。もう泣かないでもいいことになつたのよ。今日こそあなたがたに一番好きなお菓子をおあげしようね。さ、お起き」と言つて僕の両わきに手を入れて、抱き起こそうとなされた。⑬僕はくすぐつたかつてたまらないから、大きな声を出してあははあははと笑つた。

「八っちゃんが目をさましますよ、そんな大きな声をすると」

と言つてお母さんはちよつと真面目な顔をなさつたが、すぐそのあとからにこにこして僕のお寝間着を着かえさせて下さつた。

(有島武郎「基石を呑んだ八っちゃん」)

注1 ばあや…子どもの世話をする使用人。注2 基石…白と黒の石がある。二人で交互に石を置いて遊ぶ碁に用いる。注3 おちゃんちゃん…ちゃん

ちゃんこ。子ども用のそでなしのわた入れの着物。注4 鉄瓶…湯をわかすための鉄製の器。注5 頭にさしていた針…結い上げた髪の毛にさしてい

た針。女性が縫物をする時よく見かける。注6 象牙…象牙のきば。はしや印かんの材料になる。注7 だまかし船…折り紙で作つた船。

注8 前垂…前かけ(現在のエプロン)。

*問題作成に当たり、本文の内容、表記を一部改めた。

問1 傍線部①「おとなにお遊びなさいよ」とはどういうことか、説明しなさい。

問2 傍線部②「今けんかしたばかりだから、僕から何かいい出してはいけなかった」とあるが、僕はどのようにしてこのように思つたのか、説明しなさい。

問3 傍線部③について、「ウサギが居眠りしなくてもカメの方が駆けつこに勝」つとなぜ困るのか、僕の思っていることをわかりやすく説明しなさい。

問4 傍線部④「()を白くしたり黒くしたり」とあるが、()にあてはまる言葉を、漢字一字で答えなさい。

問5 傍線部⑤「兄さん水は……早くお母さんの所にいつて、早く来て下さいと……」というところから、ばあやのどのような様子がわかるか、説明しなさい。

問6 傍線部⑥「僕にはそこがそんなに静かなのが変に思えた」とあるがなぜか、わかりやすく説明しなさい。

問7 傍線部⑦について、お母さんが「思わず笑おうとなされたが、すぐ心配そうな顔になつたのはなぜか、それまでの出来事を考えてわかりやすく説明しなさい。

問8 傍線部⑧「お呑みになつたんでしようかもないもんじゃないか」とあるが、ここでお母さんはばあやの言葉をくり返しています。このときのお母さんの気持ちを説明しなさい。

